令和２年度　第１回　安曇野市まちづくり推進会議ワーキンググループ
「区の意義や重要性の理解促進」　会議概要

１	審議会名	安曇野市まちづくり推進会議ワーキンググループ 「区の意義や重要性の理解促進」
２	日　　時	令和３年２月 19 日(金)　午前９時 30 分から午前 11 時 45 分まで
３	会　　場	豊科交流学習センター「きぼう」多目的交流ホール
４	出 席 者	田村会長、熊井副会長、大澤副会長、中槇委員、瀧澤委員、増田委員、青柳委員、藤松委員、玉井委員、妹尾委員、堀井委員、望月委員、宮﨑委員、野中委員、土屋委員　計 15 人
５	市側出席者	山田市民生活部長、地域づくり課　髙橋課長、児玉課長補佐 寺島主任、藤原主任
６	公開・非公開の別	公開
７	傍聴人　０人	記者　２人
８	会議概要作成年月日	令和３年２月 26 日

協　　議　　事　　項　　等

１　会議の概要

（１）開会

（２）あいさつ

（３）協議事項

①　市からの依頼に基づく各主体の進捗状況の報告、共有

②　その他

（４）その他

（５）閉会

２　会議事項概要

（１）開会

（２）あいさつ（田村会長）

（３）協議事項（進行：山田部長）

①　市からの依頼に基づく各主体の進捗状況の報告、共有

【事務局】

※事務局が市からの依頼に基づく各主体の進捗状況を説明。

【委員】

・転入者に配っている冊子のタイトルが「区に加入しましょう」になっているが、未加入者から「入っても入らなくてもどうでもよい」という印象を受け止められかねない。

・取り組み状況の中で高齢者の足の確保について書かれていないが、区に新しく加入した市民にとって関心があるため記載できるようにしたら良い。

【委員】

・区に情報が来るのは要支援者の市民だけで、賃貸住宅にどういった人が住んでいるかまで分からないのが実情だ。真々部区では、賃貸住宅に住んでいて区に情報が来ない人については積

極的に加入を勧めることは控えた方がよいという認識でいる。賃貸住宅居住者の区への加入率はほぼ０％に近く、加入促進は及び腰になっているのが実情だ。
【事務局】
・「区に加入しましょう」というタイトルは改めた方が良いという意見があった。
【委員】
・既存組織の一員になってくださいというよりも、「あなたも一緒に」という方が良いと感じる。
【事務局】
・タイトルは事務局の方で工夫をしてほしい。
・アパート住民の中には安曇野市に住民票を移さない人もいる。そういった人は転入の手続きで市役所を訪れることがなく、地域づくり課でも区への加入を案内することができない。アパート住民とどういった地域づくりをしていくかも課題だ。
【委員】
・基本的にアパートは仮の住まいで、ほとんどの人は地域住民と仲良くしようと考えていないと思う。安曇野市に移住してくる人には、まず賃貸住宅で２、３年住んでいただき、風土や地域性を確認していただき、市の１番気に入った所で物件を探してくださいと勧めている。
・子どもがいる賃貸住宅居住者は、ＰＴＡの集まりで同じような子育て世代とコミュニケーションを取っており、区に未加入でも不自由がないと思われる。
・ごみの処理についても、賃貸住宅の場合はオーナーが責任をもって処理することになっており地域と直接関係ない。
・私も区長経験者だが、賃貸住宅居住者の情報まで持っていなかった。ただ、オーナーからは協力金をいただき、回覧文書はオーナーから賃貸住宅居住者に配っていただいていた。
・賃貸住宅居住者については区の加入率に含めていいのか疑問を持っている。
【委員】
・質問だが、災害時に救援物資は区未加入者の分も数に含まれるのか。
【事務局】
・災害物資は区への加入、未加入関係なく届けられる。
【委員】
・やはり安心して暮らせるかどうかという視点が大切になる。区に加入するメリットをしっかり説明することが必要。事情があって区に入りたくない方にも情報が行き渡ることを心掛け、孤立しないようにすることが安曇野市は安心だと思っていただく一歩になる。
【委員】
・私の経験として、賃貸住宅居住者の見守りや区への加入促進は悩ましいのが実情だ。個人情報との兼ね合いから踏み込んだ活動ができないが、社会とのつながりを絶たないようすることも大切。賃貸住宅の大家が居住者を把握しているため、大家に情報を提供し、大家から居住者の情報を提供していただく活動をしてきた。
【事務局】
・賃貸住宅居住者へのアプローチは簡単に解決できないかもしれないが、子ども会育成会やＰＴＡなどとの連携の中で手掛かりが生まれてくるとも感じた。
・引き続き市区長会などへの取り組み内容について意見を聞きたい。

【委員】
・明科地域区長会はこれまで引継ぎは１回もなされていない。新しい区長が明科地域区長会の三役になっても何から始めていいか分からず私自身悩んだ。地域全体で取り組む課題と各区の問題点を整理することに時間がかかり、１年の区長任期では全体を把握することができない。何をやったらいいか把握できないまま任期が終わり、そして引継ぎがないということを毎年繰り返しているように感じる。前進する要素がなく残念だ。一方、２年やればある程度のことが見えてくる。ＯＢも残る体制の構築も必要。各区の区長任期は最低でも２期４年とする組織体制が良いのではないか。
・区長会研修会は、新型コロナウイルスの影響で時間を確保できなかった。ＤＸ（デジタルトランスフォーメーション）を活用し、オンラインでできる環境を作り上げてほしい。
・安曇野市内でも、例えば豊科地域と明科地域では課題が異なる。市区長会の専門部会は、各地域区長会にそれぞれ専門部会を置くくらいが良い。そうすれば各地域内がさらに良くなる。
【事務局】
・市区長会の事務局は地域づくり課が務めているが、本年度は特に新型コロナの影響で会議の時間短縮や出席者の限定をせざるを得ず、積み上げてきたものを現区長と共有できる時間が限られてしまった。
・区長の任期、引継ぎ、ＯＢの支援が不十分という指摘だったが、それぞれ住んでいる区の事例があれば出していただきたい。
【委員】
・ＯＢの関与について、まちづくり推進会議の提案には「顧問を置くことができる」という文言がある。顧問を置ける規定を設けている区がいくつくらいあるか。例えば柏原区は規定に同様の文言がある。ＯＢの支援はそれなりの形を作った上で行わなければならないが、ＯＢ側からするとでしゃばることもできないのが実情だ。求められたらいくらでも協力できるため、形を作っていくことが必要になる。
・区長の任期は、区長経験者として複数年が望ましいと感じている。長ければ長いほど良いのが本音。１年目は状況を把握するのに精いっぱいだ。自分の色、考え方を出して展開するのは２年目以降になる。区長の任期に関する取り組み状況は「各区の実情に応じた取り組みをしている」とあるが、１年に１回で結構なので状況がどう変化しているかを事務局で調べてほしい。状況を各地域区長会に提供することで、現職の意識革命につながっていく。
【事務局】
・区のマニュアルを作成する際には３分の２近くが複数年の任期だった。その後、特に明科地域は、ほとんどが２年任期になっていると把握している。一方、代表区長制を採用している堀金地域と三郷地域は複数名の区長がおり、１年目は区長という名前は付くが区のトップ以外の役を務め、２年目に代表区長を務めるといった工夫をしている。
【委員】
・下堀区は２年任期だが１年目の時は２年目の区長から教わる。２年目は１年目の経験を踏まえて取り組む。区長は４人いるが、２人ずつ代わるという仕組みだ。
【事務局】
・各区とも引継ぎやＯＢ支援は必要だと感じている。部制度を通じて既存制度の見直しを進め、

検討の中でより良い仕組みにしている段階だと認識している。
・人材の活用などについて意見を伺いたい。
【委員】
・ＮＰＯ法人として２０１８年度からふるさと遺産の認定に取り組んでいる。認定するだけではなく、そのエリアで活動している団体と協定を結ぶという仕組みだ。本年度の認定で真々部区の屋敷林が有力候補となった。ただ、地域活動が盛んな真々部区ですら後継者不足に悩んでいた。どの区でも同じ課題があるのではないか。地域で活動してきた人たちを地域の若手に世代交代していくことについて、区に任せるだけではなくＮＰＯ法人などがサポートしていく大切さを感じた。潮沢ロマンの会は協定を結ぶことによって活動する機運が高まっている。そういった仕組みを考えていかなければ難しい。区に任せるだけではなく、市が関わり、公民館や市民活動団体などと結びつけることを考える必要がある。
【事務局】
・各主体の取り組みでは、区との連携やつながりが必要になっている。区の課題を区だけでは解決できなくなっていく中、さまざまな技術やノウハウを持っている団体やＮＰＯ法人と連携していくことが今後より重要になっていくという話だった。団体が取って代わるのではなくサポートしていくことが大切になる。
【委員】
・福祉事業所としてこのワーキンググループに参加している。本年度は新型コロナの影響でさまざまなことを取り組むことにハードルがあった。公民館で開いている講演会などは開けなくなったが、代わりにエンディングノートを無料配布する活動を行ったところ区民から個人的に連絡をいただくといったつながりができてきた。
・成相区は元市区長会長が防災部長を務めており、以前から区内の福祉事業所を集めて協力体制について話してくれている。昨年 12 月に「コロナ禍で進まない」と話してくれたが、随時連絡をいただきながら一緒に作っていくことになれば良い。区の中に入ってもらいたいと話してくれると、区内の福祉事業所が役立てると感じている。
【事務局】
・区と福祉事業者との連携も重要で、昨年度は市民活動サポートセンター主催で区長と団体との交流会を開催した。本年度はコロナ禍で開催できなかった。区にある福祉事業者のリストは区長に渡している。今後も密接に連携していきたい。
・公民館という立場で地域資源の発掘などをしているが、人財に関して話を伺いたい。
【委員】
・コロナ禍でもあり、地区公民館によって対応の温度が違い、事業がある程度できた所とほとんどできていない所があるのが実態だ。
・各地区公民館は人材を把握しているが共有できていない。
・目標が掲げられている区と掲げられていない区があり、地区公民館との連携をどう図ればいいか課題だ。
・区と中央公民館が一体となって活動している所もあり、まずは情報を集めていきたい。
【事務局】
・地域の公民館の役員は比較的若い世代が務める。そこでの経験が区の役員としての活躍につ

ながっていく。
・公民館ではさまざまな学びがされている。公民館と地域づくりを結び付けていきたい。
【委員】
・安曇野暮らし支援協議会は官民協働で移住・定住の支援をしている。昨年は東京や大阪などでのセミナーはほとんどできなかった。オンラインのセミナーや相談会を何回かやったが、対面せずに話をするのは難しいと感じた。ただ、工夫を凝らしてオンラインも形になりつつある。
・安曇野市に来てどこに住むかが移住者の大きな悩みだ。移住者はコミュニティに入ることへの不安があるため区のことを聞かれるが、私たちも全 83 区のことを分かっているわけではない。区の紹介カードがホームページに載ると、紹介につなげられる。
・移住者が区への加入に抵抗があるとは感じていない。特に災害時には自助、共助が大切になるため、まず区に入って仲間をつくることが大切だと話す。移住するということは、こちらの住民になるということ。区に入ることは１番の基本だと話している。
・コロナ禍で移住希望者は増えていると聞く。協議会の役割は大きくなる。区の重要性を引き続き訴えていきたい。
【事務局】
・アンケートでは区に入るかどうかは、区を知ってからという回答もいくつかあった。
・受け入れ側で活動している人の話を伺いたい。
【委員】
・小学生くらいの子どもがいる世帯はすんなりと区に入ってくれる。近所で集まって身近な話題で普段から交流するなど、すそ野を開拓することが大切。
・隣組長は福祉員になっており、未加入者にアンテナを高くすると提案されている。ただ、情報がないし荷が重いのではないかと感じている。
【委員】
・知らない所に入っていくのは怖いため、誰か知っている人がいると行きやすい。区長は遠い存在なため、最初に区の決まりなどをフォローしてくれたり、一緒にイベントに誘ってくれたりすると良い。その際はほどよい距離感が望ましい。
・移住者は地域コミュニティに関わりたい人が多い。まずはサークルやＮＰＯ法人などに入り、区と連携する中で区に関わっていければ良いと感じている。
【委員】
・福祉員はさりげない見守りと声掛けとつなぎ役。大きな役割を担っていただくということではないということは大事なコンセプトだ。あえて１年交代なのは、福祉員が時間をかけて広げていく期待がある。区と隣組長である福祉員がつながることで、区で生活することへの安心感につながっていく流れが自然だと感じる。本年度の「地域の世話焼きさんスキルアップ講座」は、延べ 60 人ほど受講した。地域の中で役に立ちたいと思っている人は大勢いる。何気ない日頃の生活を通じて、区への加入・未加入関係なく周りに目を向ける人が増えることを市社協としても目指している。
【委員】
・新型コロナの影響で中止・延期・縮小となり、動きにくい状況になっている。今、模索をしている段階で悩んでいる。

・各地域の状況を聞いて他地域でも参考にしようと考えている。
【委員】
・コロナ禍で民生委員も動きにくい状況が続いている。１人暮らしや障害のある方に会いに行く口実を作りたいと考えていたら、賞味期限の近い災害用物資をいただいたので、昨年は声掛けしながら訪問して渡した。良かった取り組みだと考えている。
・コロナ禍でも公民館での健康体操は続いている。近所同士で参加しなかった人を誘い、ウオーキングをするなど良い事例がある。
・コロナ禍の中で何かできることはないかと考えていくことが大事だと感じている。
【委員】
・公民館主催で敬老会を行っているある地区が、記念品を高齢者宅に出向いて届けたという事例があった。コロナ禍でも視点を変えると違うアプローチがあると参考になった。
・三郷地域の二木地区公民館ではリンゴ畑を一区画買い取り、参加者を募ってリンゴ狩をしたり農家の話を聞いたりしている。
・区への加入、未加入関係なく参加できる行事は工夫の余地がある。紹介していきたい。
【委員】
・社協は本所を中心とした部分と地区社協を中心とした部分がある。地域の社協は地区社協のまとめ役。コロナ禍でほとんどの事業が中止になってしまっている。社協の活動そのものはボランティアの協力なくしてはできない。人づくりは苦労して取り組んでいる。
【委員】
・市社協と地区社協の取り組みがあるが、総じて言えることは新型コロナでこれまでのことができないということ。市社協として、こういうことならばできるのではないかと地区社協会長や区長に提案している。一極集中型の集客型の事業ではなく訪問型に変えるなど、これまでから方法を一変したものもある。訪問することでよりきめ細やかな方々に顔をつなぐことができた。ピンチこそチャンスと捉えてやることができた。
・大切なことは、区、地区社協、地区公民館といったコミュニティをベースとした取り組みがより連携されていくことと、取り組みが多くの人に行き渡ることだ。区の加入、未加入ではなく、さまざまな事業が区をベースに行われていると知ってもらうこと。区がベースになり、横のつながりで地域への事業が推進されている。
【委員】
・まちづくり推進会議のワーキンググループに参加できてとても良かった。一種の異業種交流会で、独自な切り口からの考え方を聞くことができた。子ども会育成会は私の住む三郷地域で十数団体ある。５地域合わせたら相当な数になるが、異業種交流会は開かれていない。まず各地域で集まり、市の代表が集まればさまざまな意見が出るだろう。
【委員】
・来年度から、これまでの活動を子どもたちに還元していきたいと感じている。教育現場では探究型教育が求められているが、学校現場だけでは難しいので区、公民館、ＮＰＯ法人が関わる必要性が高まるという点ではよい機会だ。ただ、これまでは大人が知っていることを子どもに一方的に教える感じだが、それでは子どもは楽しめない。昨年秋、松本市梓川小学校で、子どもたちが地域の宝探しをしてその答えを大人が楽しく教える謎解きウオークを実施した。そこに

大きなヒントがあった。教育委員会と話しながら今後の事業を考えており、区も関わることで子どもと大人をつなぐ存在になる。

【委員】

・宅建安曇野会の取り組み内容で記入した部分に補足したい。中古住宅、土地造成関係の業者は安曇野市内だけではなく松本、塩尻、大町の各市などにもあるため、そういった業者も含めて区への加入促進の協力体制を取っていくことがより効果的ではないかと考える。

【委員】

・福祉事業者と言っても障害関係と介護保険関係は全く区との関わりが違う。どう関わっていくかオープンにすることが大切だ。市には介護保険事業者連絡会があり、私は小規模の通所部会の部会長を務めている。部会長の任期は２年だが、他のメンバーは１年で替わってしまう。小さな部会でもそういう状況。このワーキンググループは良い集まりだと考えているため、この仕組みを連絡会に伝えていきたい。介護保険事業者連絡会の事務局は介護保険課が務めているため、市役所内の横の連携も意識していただけるとありがたい。

（４）その他

① 会議に欠席した小口委員から寄せられた提案を代読

② 市民活動サポートセンターの今後の事業を紹介

（５）閉会